何が知覚されうるのか
―知覚経験の許容内容について―*

源河亨

概要

This paper provides a survey on the dispute about *the admissible contents of perceptual experience*. The question is whether we can perceive any "high-level properties" (such as causal property, disposition, kind property, mental state of others, moral property, absence, etc.). Low-level theorists claim that only "low-level properties" (such as color, shape, motion properties, sounds, etc.) are perceivable, whereas high-level theorists claim that some high-level properties are too.

In Sect. 1, I explain the problem. In Sect. 2, I introduce the widely accepted account of perceptual experience, that is, *the content view*. By using it, I explain why this problem has attracted much attention in recent years. Next, I consider an argument for the low-level theory and an argument for the high-level theory in turn (Sect. 3 and 4). Both arguments are based on the relation between *phenomenal character* and perceptual content. I show that both arguments are insufficient in themselves. Finally, I suggest some morals can be drawn from these considerations on the dispute (Sect. 5).

Keywords: the admissible contents, the content view, perceptual experience, phenomenal character, high-level property

1　はじめに

本稿は、知覚の哲学において近年注目を集めつつある「知覚経験の許容内容」(the admissible contents of perceptual experience)をめぐる議論についてのサーベイである。

* *CAP* Vol. 5 (2013-2014) pp. 1001-1015. 受理日: 2013.8.30 採用日: 2014.1.22 採用カテゴリ: サーヴェイ論文 掲載日: 2014.2.12.

何かを知覚することで私たちはさまざまな物事に気づく。たとえばリンゴを見る場合、リンゴがもつ赤さを知覚することで、対象は赤いと気づくだろう。同様に、リンゴがもつ丸さを知覚し、対象は丸いと気づく。一方でこのとき私たちは、対象がリンゴであるということにも気づいている。しかも、こうしたリンゴについての意識経験は、赤さや丸さについての意識経験と同じく、素早く、推論など介さずに生じているように思われる。また、赤いものを見た場合に対象は赤いと気づかざるをえないように、リンゴを見た場合に対象はリンゴであると気づかざるをえない。では、リンゴであるという性質は、赤さや丸さと同じく知覚されたのだろうか。それとも、推論過程が介在していないようにみえはするが、やはり、判断・解釈されたのだろうか。そもそも、**私たちの意識に現れるさまざまな物事のうちのどこまでが知覚されたものなのだろうか**。これが知覚経験の許容内容の問題である。

色・形・大きさ・位置・運動・距離・重さ・におい・味・音・感触・温度といった一般的に「感覚的性質」と呼ばれる性質が知覚可能だということは、ふつう問題なく認められる。知覚可能性が問題なく認められるこうした性質は「**低次性質**(low-level properties)」と呼ばれる。他方で、それが知覚できるかどうかが問題となる性質や特徴は「**高次性質**(high-level properties)」と呼ばれる。(「低次」と「高次」はこうしたおおまかな区別であって、知覚・認知システムの処理過程や性質間の存在論的な関係を反映させたものではないことに注意されたい。こうした区別は Bayne 2009、Fish 2010: 136、 Logue 2013、 Macpherson 2011 に依拠している。)たとえば、次のような高次性質が知覚可能であるかどうか論じられている。(以下で挙げている論文には、当該の高次性質の知覚可能性を擁護するものも反対するものも含まれる)。

- 種性質[*1] (Bayne 2009; Brogaard 2013; Byrne 2009; Crutchfield 2011; Pautz 2009; Siegel 2006)
- 傾向性 (Nanay 2011a, 2011b, 2012[*2])
- 意味論的性質[*3] (Matey 2013; O'Callaghan 2011; Siegel 2010a)
- 因果的性質 (Butterfill 2009; Michotte 1963; Siegel 2010a)
- 他者の心的状態 (McDowell 1982; McNeill 2012)
- 不在・欠如 (Farennikova 2012; Sorensen 2008; 源河 2014)
- 道徳的性質 (Audi 2013; Cullison 2010; McBrayer 2008; McDowell 1985)
- 美的性質 (Dorsch 2013; Levinson 2001; McDowell 1983; Schellekens 2006; Sibley 1959)

そして、私たちが知覚可能な性質は**低次性質のみ**であると主張する立場は「**低次説**」(the low-level theory)と呼ばれ、低次性質の他に**何らかの高次性質も**知覚されうると主張する立場は「**高次説**」(the high-level theory)と呼ばれる。

[*1] 種性質には、リンゴ性や虎性といった自然種だけでなく、車性や飛行機性といった人工種も含まれる。

[*2] 2011a は傾向性一般の知覚可能性が論じられているが、他ではとりわけ〈掴める〉や〈食べられる〉などの対象への行為可能性(action properties)が論じられている。

[*3] 意味論的性質(semantic properties)とは、文や発話がもつ意味や、その文や発話が特定の言語に属するという性質(たとえば、英語で書かれた文がもつ〈英語である〉という性質)のことである。

知覚経験の許容内容の問題は、「知覚経験はどれだけのものを対象としうるか」という知覚経験の本性についての問いであり、この問題が注目されるようになった背景には後述するような知覚の哲学の動向がある(2 節)。だが、注目を集めている他の要因として、高次説が興味深い認識論的・存在論的含意をもつという点も挙げられるかもしれない。たとえば Sorensen (2008)は、不在は知覚されうるという議論を使って、不在は知覚対象として世界の中に存在するものであり、さらに、知覚経験を引き起こすような因果的な効力(いわゆる不在因果)をもっていると主張している[*4]。他にも Audi (2013)は、道徳知覚の可能性を用いて道徳知識を基礎付けようと試みている。つまり、特定の高次性質が知覚可能だと示せたならば、その性質は知覚対象に備わる特徴(客観性・因果的効力・特別な正当化を与える、等々)をもつと主張することができるのである。

しかし、こうした戦略は高次説が正しいと判明した場合に可能になるものである。そのため、まずは知覚経験の許容内容の問題自体を検討してみる必要があるだろう。本稿の目的は、経験の本性についての問題に関わる近年の議論を整理し、展望を提示することである。

本稿の構成を述べておこう。2 節では、センスデータ説から**内容説**(the content view)への移行という知覚の哲学の動向を確認し、それをもとに知覚経験の許容内容の問題とその背景を説明する。また、以下の議論で必要な「**経験の現象的性格**(phenomenal character)」という概念を導入する。3 節と 4 節では、知覚内容と現象的性格に関する考察に基づいて低次説・高次説を支持する議論を順に検討し、どちらもいまのところ不十分であることを説明する。最後に 5 節では、以上の考察から得られる展望を述べる。

2 知覚の哲学の動向

「知覚経験の許容**内容**」という名前は、知覚経験が内容をもつと考える内容説(志向説)を前提としている。内容説は現在の知覚の哲学において広く受け入れられている立場であり、実際、この問題に取り組んでいる論者の多くは内容説に基づいて議論している[*5]。

だが、この問題が注目を集めるようになった理由を理解するためには、人気のある知覚理論がセンスデータ説から内容説へ移行したことを踏まえておくとよいと思われる。そのため本節では、まずは簡単にセンスデータ説を説明し(2.1)、次にセンスデータ説と対比させつつ内容説を説明する(2.2)[*6]。それを踏まえて、知覚経験の許容内容が注目を集めている理由を説明する(2.3)。最後に、この問題を検討するうえで注目

[*4] 同様に、McDowell (1983, 1985)や Levinson (2001)は、道徳的性質や美的性質の知覚可能性から、それらの性質の実在論を擁護している。

[*5] 知覚経験が内容をもつことを否定する立場(たとえば、Travis 2004 で展開されているような素朴実在論 naive realism ／ 関係説 relationalism)でも、「知覚経験はどれだけのものを対象としうるか」ということは問題になる(素朴実在論はこの問題を「知覚によって私たちはどれだけのものと知覚的関係に立ちうるのか」と言い換えることになるだろう)。だが以下で説明するように、この問題は、主要な哲学的知覚理論がセンスデータ説から内容説へと移行するのにともなって注目されるようになったと理解するのが自然である。そのため本稿では、こうした立場については脇に置く(注 14 で少し触れる)。

[*6] 二つの説の特徴づけは小草 (2009)を参考にした。

されている「現象的性格」の概念を導入する(2.4)。現象的性格を用いて低次説・高次説それぞれを支持する議論は、次節からみていく。

2.1 センスデータ説

センスデータ説は、内容説以前に広く受け入れられていた知覚理論である。現代的な知覚の哲学はセンスデータ説から始まると言うこともできるだろう。典型的なセンスデータ説によれば、知覚経験とは、主体がセンスデータという心的対象を感覚する(sensing)という心的エピソードであり、そのため、知覚経験にはセンスデータが構成的に含まれている。

センスデータ説論者はまず、錯覚や幻覚といった、意識に現れる性質をもつものが外界に存在していない誤った経験を取り上げる。たとえば、赤いものを見ているにもかかわらず青さが意識に現れている錯覚や、見ているものなど何もないのに青さが意識に現れている幻覚を考えてみよう。こうした錯覚・幻覚事例について、センスデータ説論者は、「たとえ錯覚や幻覚であっても、意識に感覚的性質が現れているのだから、そうした性質を例化している何らかの対象が存在しているはずだ」と主張する。こうした主張は現象原理(Robinson 1994: 32)と呼ばれるが、この原理に基づきセンスデータ説論者は、知覚経験が生じるときには必ず対象が存在していなければならない（知覚経験は対象を構成的に含む）と主張する。上記のような誤った経験においては、意識に現れている青さを例化している何かが実際に存在していると主張するのである。

しかし、上記の場合、実際に見られているのは赤いものであったり、そもそも何も見られていなかったりするので、意識に現れた青さを例化している対象は外界には存在していない。そこでセンスデータ説論者は、意識に現れた青さを例化している（外界の対象とは別の）心的対象ーセンスデーターを導入し、錯覚や幻覚の場合に主体はセンスデータを感覚していると主張する。そして、錯覚や幻覚と真正な知覚が主観的に区別不可能であることから、すべての知覚経験において主体はセンスデータを感覚していると主張するのである。

だが周知の通り、センスデータ説はその理論の核となる心的対象に関してさまざまな問題が指摘され（外界へのアクセスが心的対象によって阻まれている構図になる、心的対象を導入する存在論的負担が大きい、など）、現在ではあまり人気のある立場ではない。

2.2 内容説

センスデータ説が抱える困難を回避できる有力な候補とみなされているのが、内容説である。内容説によれば、知覚経験は世界をあるあり方をしているものとして表象し、表象されている世界のあり方、すなわち「表象内容（または志向的内容）」（以下、「内容」）の観点から特徴付けられる。

内容をもつものの典型は信念である。たとえば、私が「雨がふっている」と信じているとき、私の信念は「雨がふっている」という内容をもち、世界をそのように表象している。そして、このとき実際に雨が降っているならば私の信念は真であり、そうでないならば偽である。内容をもつとは、このように、世界と照らし合わ

せて正しさや正確さを問うことができるということである。

知覚経験にもこうした特徴があるように思われる。たとえば、主体の知覚的意識に赤いものが現れる場合を考えてみよう。実際に見られているのが赤いものであるならば、このときの知覚経験は真正な(veridical)ものとみなすことができる。他方で、見られているものが赤くない場合や、見られているものがそもそも存在していない場合、知覚経験は誤っており、主体は錯覚や幻覚に陥っていると考えられる。したがって、知覚経験も世界と照らし合わせて正しさや正確さを問うことができると考えられ、そのため、内容をもつとみなすことができるのである。

内容説がセンスデータ説にとってかわり広く受け入れられているわけは、心的対象を導入することなく錯覚や幻覚を扱える点にある。それは、誤った内容に含まれているものが存在していると考える必要がないからである(Harman 1990)。たとえば、「雨が降っている」という信念が正しいとき、信じられている雨降りは実際に起こっているものであるが、「槍が降っている」と誤って信じている場合、信じられている事態はどこかで起こっているものではない。槍が降るという事態は、起こっているかのように誤って信じられているだけである。

知覚経験も同様に考えられる。赤いものが外界にあり、赤さが意識に現れている場合、意識に現れている赤さは外界の対象によって実際に例化されている。しかし、赤いものが外界にあるにもかかわらず意識に青さが現れている場合に、青さを実際に例化している対象があると考える必要はない。現象原理によれば、このとき青さを実際に例化している対象が存在しなければならないが、内容という考えにしたがえば、青さは例化されているかのように誤って表象されているだけだと主張することができる。そのため、誤った経験において意識に現れている性質を例化している対象が実際に存在していると考える必要はない。このように内容説は、内容という考えに訴えて現象原理を拒否し、それによってセンスデータの導入を防ぐことができるのである。

2.3 問題の背景

センスデータ説から内容説への移行を踏まえると、「知覚経験はどれだけのものを対象としうるか」という問題がなぜ近年議論されるようになったのかを理解することができる。

センスデータ説には低次説を採らなければならない理由があった。それは、知覚経験をもつときに主体が感覚するセンスデータが、意識に現れた性質を担っている**心的**対象だと考えられていたからである。心的対象が色などの低次性質を例化しているという主張はそれほど問題にならないかもしれないが、種性質や傾向性といった高次性質を例化しているという主張は到底受け入れられない(Robinson 1994: 29; Silins 2013; Smith 2002: 48)。そのためセンスデータ説は、高次性質は知覚されて意識に現れたのではなく、知覚された低次性質をもとに判断・解釈されて意識に現れたのだと主張しなければならないのである。

しかし、内容説は現象原理を拒否し、センスデータという心的対象にコミットすることもない。そのため、センスデータ説のように低次性質のみが知覚可能だと考えなければならない理由はないのである。また、

内容説の枠組みは、「実際に存在していない事物についての表象は生じる」ということを述べてはいるが、どのようなものが表象されうるのかについて何も言っていない。つまり、内容説それ自体は知覚経験の許容内容について何も制限を与えていないのである。

知覚経験が内容をもつと考えると、次に、「その内容にはどれだけのものが含まれるか」ということが問題になるだろう。そして、まさしくこれが知覚経験の許容内容の問題である。この問題が近年になって議論されるようになったのは、内容説という枠組みが一定の理解を得ることに成功し、より細かな論点が議論されるようになったからだと言うことができるだろう[*7]。

2.4 知覚内容と現象的性格

内容説はとくに自然主義／外在主義的な立場に人気の理論であるが、実のところ、知覚内容に何が入りうるかについて、自然主義的な観点から積極的な議論が与えられているわけではない[*8]。知覚経験の許容内容に関する近年の議論は、むしろ内在主義的な観点から、経験の**現象的性格**(phenomenal character)に焦点を当てたものが主流となっている。

経験の現象的性格とは、「その経験をもつことが主体にとってどのようであるか／主体が内観可能であるような、経験がもつ質的で意識的な側面」のことであり、それによって経験がタイプ化されるような性質である（二つの経験が内観によって区別できない場合、二つの経験は同じタイプに属する）。現象的性格のさらなる特徴付けについては論争があるが[*9]、内容説を採る多くの論者は、通常、知覚経験の現象的性格と知覚内容は次のように対応していると考えている。すなわち、二つの知覚経験の現象的性格が同じなら、それらがもつ内容は同じであり、同じ性質を表象している。また、二つの知覚経験の現象的性格が異なるならば、それらは異なった内容をもち、表象されている性質が異なる、ということである。（この考えに対する反論のひとつは 4.2 節で扱う。）

以下で扱う議論の争点は次のようになる。何らかの高次性質を例化している対象を知覚するとき、私たちは特定の現象的性格を備えた経験をもつ。このときの知覚経験の（全体的な）現象的性格は、低次性質に対応する現象的性格の集まりに還元されるのだろうか。それとも、そうした集まりでは捉えられていない特徴があり、そのため、高次性質に対応する現象的性格がそこに含まれていると認めなければならないのだろうか。

[*7] 知覚経験の許容内容とは別に、「内容とはいかなる存在者であるのか」ということも問題にされるようになってきている。それについては本稿で扱えないが、たとえば、Siegel (2010b)を参照。

[*8] 因果的共変関係や目的論から特徴づけられるトラッキング関係を用いて表象を捉える自然主義的知覚理論(たとえば、Tye 1995)は、高次性質の知覚可能性と両立する。たとえば、私たちがリンゴ性についての意識経験をもつのは典型的にはリンゴが目の前にある場合であるため、その経験はリンゴ性によって因果的に引き起こされた考えることができる。そして、リンゴ性のような高次性質は人間が進化してきた環境の中に存在する性質であるため、リンゴ性を表象する能力が進化の過程で獲得されたと考えてもおかしくはない(cf. Siegel 2010a; McBrayer 2008)。

[*9] とくに、現象的性格は経験の性質であるのか経験が表象している対象の性質であるのか、そして、現象的性格は内容と同一なのかスーパーヴィーンするものなのか、といった議論が活発である。Fish (2010, chap5)を参照。

3 低次説

まず、低次説がどのような議論から支持されるかをみてみよう。本節では、現象的性格を使って低次説を支持する議論を説明し(3.1)、次にそれにどのような反論が可能であるかを述べる(3.2)[*10]。

3.1 高次性質についての誤りに基づく議論

現象的性格に焦点を合わせて低次説を支持する主要な議論は、高次性質についての誤りに基づくものである (Brogaard 2013; Byrne 2009; Logue 2013; Macpherson 2011; Prinz 2006)[*11]。

本物のリンゴと本物そっくりな食品サンプルの偽リンゴは、視覚によってどちらが本物であるかを区別できないかもしれない。同様に、悲しいふりをしている人と本当に悲しんでいる人を、見ただけで区別することができない場合がある。このように本物と偽物を区別できない場合、本物を見る経験も偽物を見る経験も、現象的性格は同じであるということになるだろう。現象的性格と内容が対応していると主張する典型的な内容説に従うなら、本物を見る経験も偽物を見る経験も同じ内容をもっていることになる。ここで、二つの経験に共通の内容を、「(対象の)見かけ」と呼ぶことにしよう。低次説論者はこの「見かけ」を使って次の二つの仕方で高次説に反対する。

第一の議論は次のようになる。本物と偽物を区別できないことから、知覚対象が実際に高次性質を例化しているかどうかは「見かけ」に違いをもたらさないことがわかる。そのため、「見かけ」に高次性質は含まれないと考えることができる。

第二の議論は次のようになる。本物も偽物も、通常の照明条件のもとで、標準的な主体に知覚されていると仮定することは問題ないだろう。すると、本物も偽物も正しく知覚されていると考えることができる。このような理由から二つの知覚経験が真正のものだと考えると、それらに共通の内容である「見かけ」は、本物と偽物によって共通して例化されている性質と対応していることになるだろう。そして、そうした性質は低次性質だけである。このことから、「見かけ」は低次性質で尽くされると考えることができる。

こうした考えに基づき低次説は、高次性質の知覚可能性を否定する。そして、本物と偽物を間違える事例では、低次性質は正しく知覚されたのだが、それに基づいた高次性質についての判断や解釈が誤っていると主張するのである。

3.2 検討

だが、こうした議論は低次説の正しさを示すのに十分ではない。というのも、高次説はこうした誤りの場合にも「見かけ」に高次性質が含まれていると主張することができるからである。

[*10] 現象的性格に注目せずに低次説を支持する議論と、それに対する反論としては、Masrour (2011)を参照。そこで検討されている議論は、低次性質への気づきだけが不可謬性・非推論的直接性・基礎性・非概念性などをもち、そのため低次性質への気づきだけが知覚であると主張するものである。そして、Masrour はいずれの議論もうまくいかないと主張している。

[*11] 内容説に言及せずに似たような議論を行っている論者もいる。たとえば、Millar (2000)、Smith(2002: 49)。

まずは第一の議論に答えよう。3.2 節で説明したように、内容説は、対象によって例化されていない性質が例化されているかのように誤って表象される場合（錯覚）があるという考えを認める。こうした点に依拠して高次説論者は、「偽物を見る経験は、実際には例化されていない高次性質が例化されているかのように誤って表象された錯覚である」と主張することができる(Siegel 2006)。つまり、本物と偽物を間違える事例は、単に信念が誤っているだけでなく、その信念のもとになる知覚経験も誤っていると考えられるのである。また、こうした考えに基づくと、本物を見る経験と偽物を見る経験の現象的性格が同じであることも説明することができる。それは、二つの知覚経験がともに低次性質と高次性質を表象している（「見かけ」には低次性質と高次性質が含まれる）ためだと言えるのである。こうした知覚経験は、知覚されているものが偽リンゴだと主体が知っている場合であっても、その信念とは独立にリンゴ性を表象しつづけるだろう[*12]。

このような主張に対して、低次説論者は第二の議論を反論として挙げるかもしれない。偽物は通常の照明のもとで標準的な主体に知覚されているため、このときの知覚は錯覚ではないのではないか。だが、偽物を見る経験が錯覚でないという考えは論点先取である。というのも、錯覚が生じうる条件とはどのようなものであるかは、高次説と低次説のどちらが正しいのかに依存しているからである。このときの条件は、もし低次説が正しければ錯覚を生じさせるものではないことになるが、高次説が正しければ錯覚を生じされるようなものだということになる。そのため、「偽物は錯覚を引き起こすような条件のもとで知覚されてはいない」という主張は、低次説と高次説のどちらが正しいのかをまさに検討しているときに、反論として使えるものではない(Logue 2013)[*13]。

以上のように、高次性質についての誤りに基づく議論は、結局のところ、低次性質のみが知覚可能だという低次説の直観を前提としており、そのため、高次説を否定できてはいないのである[*14]。

[*12] こうした応答は、双子地球の思考実験に基づいた議論に対しては有効ではない。たとえば、地球のオスカーがリンゴを見る経験と双子地球の双子オスカーが双子リンゴを見る経験は、現象的性格は同じであり、かつ、どちらも**正しい**ものである。すると、二つの経験の内容に共通に含まれているのは、リンゴと双子リンゴが共通に例化しているような性質だけであり、そのため、リンゴ性や双子リンゴ性は含まれてないということになるだろう。だがこの場合でも、リンゴと双子リンゴが共通に例化しているが低次性質の集まりには還元できない「リンゴゲシュタルト」が知覚されていると主張する余地はある(Pautz 2009)。また、こうした議論は双子地球の対応物を考えられない高次性質には適用できない。たとえば、機能的性質を本質としてもつような人工種性には適用できないだろう。

[*13] 高次説からすれば、偽リンゴのような対象は**ごくありふれた**条件のもとで通常の知覚者に高次性質についての誤った経験を生じさせるものだということになるだろう。そうすると偽リンゴはミュラー＝リヤー図形をはじめとする錯視図と同じようなものだということになるだろうが、Byrne (2009)はこうした考えは反直観的だと述べている。しかし、それ以上の反論は行っていない。これに対して高次説論者は、錯覚が生じるまでの処理過程に何らかの違いがあると認めることで両者に差異をつけつつ、ごくありふれた条件のもとで通常の主体に錯覚を生じさせるという点については、偽リンゴもミュラー＝リヤー図形も同じであると主張することができるだろう。

[*14] 注 5 で触れたような素朴実在論も、選言説(disjunctivism)を用いて誤りの事例を扱うことができる。つまり、本物のリンゴを見てリンゴ性に気づく場合に主体はリンゴ性と知覚的関係に立っているが、偽リンゴを見る場合には（本物を見る経験と主観的に区別がつかないものの）知覚的ではない心的状態にあると主張すればよい。こうした方針は、他者の心的状態の知覚可能性について論じている McDowell (1982)に見られる。

4 高次説

次に、高次説を支持する議論をみてみよう。ここでは、知覚経験の許容内容の議論に多くの論者が参加するきっかけとなった Siegel の現象的対比(phenomenal contrast)の議論を紹介する(4.1)。次に、それに対してどのような反論が向けられているかを説明する(4.2)。

4.1 現象的対比

現象的対比は、その名前が示すように、複数の経験を対比させるという工夫が施されている。その理由は、一つの経験を現象学的に観察する(内観する)だけでは現象的性格に高次性質が反映されているのかどうかが不明瞭だからだ。たとえばリンゴを見ているとき、経験の現象的性格に赤さや丸さが反映されていることは明らかである。また、バナナ性や因果性が反映されていないことも明らかである。では、リンゴ性はどうだろうか。いずれにせよ私たちはこのとき「これはリンゴだ」と気づくが、その意識経験は(高次説が言うように)リンゴ性が知覚経験の現象的性格に反映されていることによって生じたのだろうか。それとも、(低次説が言うように)私たちはこのとき「これはリンゴだ」という判断を下しているにすぎないのだろうか。内観は明確な答えを与えてくれない。

こうした困難を回避するために導入されるのが現象的対比である。この手法はさまざまな高次性質に適用できるが、ここでは種性質を取り上げてみよう。

> あなたはこれまで松を見たことがないが、さまざまな多くの種類の木が生えている林から全ての松の木を切る仕事に就いたとしよう。最初は他の人がどれが松であるかをあなたに教えてくれる。数週間経ち、松を他の木から区別する能力が向上する。最終的にあなたは、松を即座に見分けられるようになる。松はあなたにとって視覚的に目立つものになる. . . 十分な認識能力を身につける前と後での視覚経験の現象的な差異には、こうした認識能力の獲得が反映されている。
>
> (Siegel 2006: 491)

松と他の木を区別できない頃、主体が松を見たときにもつ経験全体(知覚・信念・感情などからなる経験の総体)の現象的性格は、他の木を見たときの現象的性格と区別できないようなものであっただろう。しかし、松を弁別する能力を学習し完全に身につけた頃、主体が松を見たときの現象的性格は、他の木を見たときの現象的性格とは大きく異なっていると考えられる。このことから、学習前に松を見たときの経験全体の現象的性格は、学習後の現象的性格とは異なっていることになるだろう。 そしてこの現象的差異は、それぞれの経験全体に含まれる知覚経験がもつ現象的性格の差異に由来すると考えられる。ここで典型的な内容説にしたがえば、二つの知覚経験に現象的差異があるので、それぞれの内容は異なっていることになる。そしてこの内容の違いは、学習前の内容は色や形などの低次性質しか含んでいない一方で、

学習後の内容はさらに松性を含んでいると考えることによって説明することができる。つまり、松を弁別する能力を学習することで、以前は知覚できなかった松性が知覚できるようになったと考えることができるのである[*15]。このようして、種性質が知覚可能であるという高次説が支持される。

以上の議論は次のようにまとめられる(Siegel 2010a: 100-101)。松を弁別する能力を学習する前の松についての知覚経験を E1、学習後の松についての知覚経験を E2 とする。そして、学習前の（E1 を含む）経験全体を標的経験、学習後の（E2 を含む）経験全体を対比経験とする。

(0)標的経験と対比経験は現象的性格が異なっている。
(1)標的経験と対比経験に現象的な差異があるならば、E1 と E2 には現象的な差異がある。
(2)E1 と E2 に現象的な差異があるならば、E1 と E2 の内容は異なっている。
(3)E1 と E2 の内容の違いは、E1 と E2 で表象されている何らかの性質 K の違いである。
（E2 にだけ松性が含まれている）。

すでに述べたように、この論証は他の高次性質にも適用できる。まず、知覚内容に含まれる低次性質が同じであるにもかかわらず現象的性格が異なる二つの経験を取り上げ、以上の論証を使い、その差異は片方の知覚内容に高次性質が含まれていることによって説明されると主張すればよい[*16]。

4.2 検討

では、この論証にどのような反論が向けられるかをみてみよう。

(0)は問題なく認められるだろう。なぜなら、松と他の木を視覚的に弁別できるようになったという変化があるにもかかわらず、二つの経験全体の現象的性格に違いがないと想定するのは困難だからだ。

(1)に対しては当然、「経験全体の現象的差異は知覚経験以外のものに由来するのではないか」という疑いが向けられる(Butterfill 2009)。たとえば、松を弁別できるようになった頃、主体は松を見たときに「これは松だ」という信念をもつだろうが、こうした信念が現象的差異を生み出したと考える余地もある。これに対する反論として Siegel は、松だと思っていたものが実はホログラムで投影された映像であった場合を挙げている。その事実を知ったとき主体は「これは松ではない」と信じるようになるだろうが、それでも経験全体の現象的性格は変化しないだろう。3.2 節で述べた偽リンゴの例と同じように、主体が「これは松ではない」と信じていたとしても、知覚経験は松性を誤って表象し続けていると考えられるのだ。このことから Siegel は、現象的差異を生み出しているのは、対象が松であることにコミットするような心的状態（信念・判断・直観）ではないと主張している。

しかし(2)に対しては次のような批判が向けられる。仮に(1)が正しく、そのため(2)の前件が正しいとしても、

[*15] 学習により知覚対象の範囲が広がるのかどうかは（とくに認知的浸透性 cognitive penetrability の観点から）心理学や認知科学でも議論されている。たとえば Pylyshyn (1999)とそれに対する Open Peer Commentary を参照。

[*16] 他にも Siegel は、意味論的性質や因果的性質にこの議論を当てはめ、それらの知覚可能性を擁護している(Siegel 2010a)。また McBrayer (2008)はこの議論を使って道徳的性質の知覚可能性を擁護している。

(2)の後件「E1 と E2 の内容は異なっている」が導かれるわけではない。2 節で現象的性格を導入した際に、「知覚経験の現象的性格は知覚内容に対応していると考えられている」と述べたが、これを拒否する論者もいる。たとえば、松を弁別できるようになった頃に主体は松を「見慣れた感じ(familiarity)」をもつだろうが、学習前後の現象的差異はこの見慣れた感じによると考えられるかもしれない。そして、見慣れた感じは、「ぼやけ(blurriness)」と同じように、知覚内容に含まれる性質ではなく、知覚経験自体の特徴であると考える余地がある(Brogaard 2013)[*17]。この他にも、学習前後で変わってしまった「松に対する注意の向け方」(表象内容ではなく表象媒体の違い)が現象的差異を生み出していると考える余地もある(Logue 2013)。このように、内容は同じままでも現象的性格は変化しうると考えられるのである。

たとえ(1)と(2)がともに正しくとも、(3)「片方にだけ種性質が含まれている」が導かれるわけではない。というのも、学習後には学習前よりもきめ細かな(しかし、種を判定するために重要な)低次性質を知覚することができるようになった可能性があるからである。そうだとすると、知覚内容の差異を生み出したのは、種性質ではなく低次性質のきめ細かさだということになる(Crutchfield 2011; Price 2009)。つまりこのステップは、知覚内容の差異がどの性質に由来するものであるのかを示せていないのである(Pautz 2009)。

このように、この論証はせいぜい高次性質が知覚されている可能性を示すアブダクティブなものであるが、高次説が正しいものであることを示しているというには程遠いものである。

5 展望

これまでみてきたように、高次説も低次説も、それぞれの直観に基づいて議論を作ってはいるが、どちらも相手の立場を否定するのに十分な議論を示せてはいない。

このように論争が直観のぶつけ合いのような様相を呈しているところをみると、実際のところ現象的性格についての理論中立的で堅固な直観というものはなく、そのため、現象的性格に基づく限りこの論争は決着がつかないのではないかと思われるかもしれない(両者が挙げている例はどちらも日常的な経験に見出せるものであるため、高次説の直観も低次説の直観も、前哲学的な素朴な直観の異なる側面なのかもしれない)[*18]。

[*17] 見慣れた感じを知覚経験以外の非表象的な心的状態と解釈する場合には、(1)に対する反論となる。こうした反論に対して Siegel は、対象を(見慣れたものとして)表象していない見慣れた感じという経験はありえないと主張している(2010: 109)。だが、ぼやけとの類比からわかるように、見慣れた感じが非表象的である可能性はある。対象がぼやけて見えるときの経験は、対象を表象しているが、ぼやけ自体は世界の中に存在するものではない。そのためぼやけは経験の性質であると考えられるのである。同様に、見慣れた感じも非表象的であると言えるかもしれない。

[*18] こうした事情を考慮して Fish (2013)は、現象的性格についての直観は論者がコミットしている立場の影響を受ける可能性があると論じ、そうした方法論的な問題を避けるため、経験科学で扱われる観点から問題に取り組んだ方がよいのではないかと示唆している。しかしながら、現象的性格をまったく扱わず、非意識的な過程だけでこの問題に取り組むことは不可能であるように思われる。というのも、Masrour (2011)が指摘しているように、特定の非意識的な処理がどのような認知過程に属するのかを決めるためには、部分的に、知覚経験の許容内容に訴える必要があるからである。たとえば、種性質の気づきに関連する非意識的な処理は、種性質が知覚可能であるということになれば知覚的処理に分類され、そうでないなら思考的処理に分類されるかもしれない。

あるいは、この議論の前提自体を疑わしく思う人もいるかもしれない。知覚経験の許容内容をめぐる従来の議論は「高次性質は知覚されたのか、それとも判断されているにすぎないのか」ということを問題としているが、そこでは知覚と思考が明確に区別できることが前提とされている。しかし、高次性質は知覚と思考の中間的な心的状態によって表象されていると考えられるかもしれない(Logue 2013)。もしそうであれば、こうした議論はそもそも誤った前提に基づいていることになる。

だが、そこまで悲観的になるのは早急だと思われる。というのも、本稿でみてきた低次説と高次説による議論は、「高次性質が**一般に**知覚可能か」という形式になってしまっており、そのため議論に無理が生じているのかもしれないからである。

むしろ、何らかの理由で高次説を採りたいなら、特定の高次性質が知覚可能かどうか個別に検討した方がよいと思われる。というのも、上記のような一般的な議論に結論が出ないことから、それぞれの高次性質が知覚されていると判定するために鍵となる現象的性格は(もしあるとすれば)、性質ごとに異なっていると考えられるからだ。たとえば、種性質は美的性質とはかなり異なる仕方で知覚経験の現象的性格に反映されており、そのため、一般的な議論では答えが出せなかったのかもしれない。

一方で、低次説を擁護したいならば、知覚内容と現象的性格の関係に基づく議論よりもむしろ、センスデータ説のように知覚可能性に一般的な制限を与える知覚理論を模索した方がいいだろう。すでにみたように、内容説という枠組みは低次性質のみが知覚可能であるという制限を与えてはくれないからである。

とはいえ、知覚経験の許容内容の問題に決着がつけられていないということから、少なくとも、「低次説が正しいと決めてかかることはできない」と言うことはできる。というのも、高次性質が知覚不可能だと言えないからには、低次性質のみが知覚可能だと主張する根拠も与えられていないからである。認識論や心の哲学だけでなく、知覚が関わる倫理学や美学の問題においても、さらに、知覚の哲学でさえも、とくに議論もなく低次説が受け入れられ、高次性質は思考の対象だと考えられることがしばしばある。こうした状況が生じている理由の一部は、センスデータ説が有力であったころの名残なのかもしれない。だが、内容説という枠組みが浸透したいまでは、高次性質の知覚可能性を拒否する明確な理由は見当たらないし、ひょっとすると、何らかの高次性質は実際に知覚可能なのかもしれない。その場合、低次説を自明視して作られた議論は足をすくわれることになるかもしれない。

付記

本稿は、2013 年度応用哲学会大会ワークショップ「知覚の哲学の最近における展開をめぐって 3:「知覚」概念の臨界」における発表と、2013 年度日本現象学会大会ワークショップ「知覚の哲学ー分析哲学と現象学の交差点ー」における発表に基づいている。

謝辞

本稿およびその前段階の原稿に有益なコメントをくださった太田紘史氏、小草泰氏、藤川直也氏、そして本誌の匿名の査読者に感謝の意を表する。

参考文献

[1] Audi, R. (2013) *Moral Perception*. Princeton: Princeton University Press.

[2] Bayne, T. (2009) `Perception and the Reach of Phenomenal Content', *Philosophical Quarterly* 59 (236): 385-404.

[3] Brogaard, B. (2013) `Do we perceive natural kind properties?', *Philosophical Studies* 162 (1): 35-42.

[4] Butterfill, S. (2009) `Seeing causings and hearing gestures', *Philosophical Quarterly* 59 (236): 405-428.

[5] Byrne, A. (2009) `Experience and Content', *Philosophical Quarterly* 59 (236): 429-51.

[6] Crutchfield, P. (2011) `Representing High-Level Properties in Perceptual Experience', *Philosophical Psychology* 25 (2): 279-294.

[7] Cullison, A. (2010) `Moral perception', *European Journal of Philosophy* 18: 159-175.

[8] Dorsch, F. (2013) `Non-Inferentialism about the Justification of Aesthetic Judgements', *The Philosophical Quarterly* 63 (253): 660-682.

[9] Farennikova, A. (2012) `Seeing Absence', *Philosophical Studies*, DOI 10.1007/s11098-012-0045-y.

[10] Fish, W. (2010) *Philosophy of Perception*. New York: Routledge.

[11] ———. (2013) `High-level properties and visual experience', *Philosophical Studies* 162 (1): 43-55.

[12] Harman, G. (1990) `The intrinsic quality of experience', *Philosophical Perspectives* 4: 31-52.

[13] Levinson, J. `Aesthetic Properties, Evaluative Force, and Difference of Sensitivity', in E. Brady and J. Levinson (eds.), *Aesthetic Concepts: Essays After Sibley*. Oxford: Clarendon Press, 61-80.

[14] Logue, H. (2013) `Visual experience of natural kind properties: is there any fact of the matter?', *Philosophical Studies* 162 (1):1-12.

[15] Macpherson, F. (2011) `Introduction: The Admissible Contents of Experience', in K. Hawley and F. Macpherson (eds.), *The Admissible Contents of Experience*. Oxford: Wiley‐Blackwell.

[16] Masrour, F. (2011) `Is perceptual phenomenology thin?', *Philosophy and Phenomenological Research* 83: 366-397.

[17] Matey, J. (2013) `You can see what 'I' means', *Philosophical Studies* 162 (1): 57-70.

[18] McBrayer, J. P. (2008) *A Defense of Moral Perception*. PhD Dissertation. University of Missouri.

[19] McDowell, J. (1982) `Criteria, defeasibility, and knowledge', *Proceedings of the British Academy*

68: 455-479.

[20] ———. (1983). `Aesthetic Value, Objectivity, and the Fabric of the World', in E. Schaper (ed.), *Pleasure, Preference and Value*, Cambridge: CUP, 1-16.

[21] ———. (1985). `Values and Secondary Qualities', in T. Honderich, (ed.), *Morality and Objectivity*, London: Routledge and Kegan Paul, 110-129.

[22] McNeill, W. E. S. (2012) `On Seeing That Someone is Angry', *European Journal of Philosophy* 20 (4): 575-597.

[23] Michotte, A. (1963) *The Perception of Causality*. London: Methuen.

[24] Millar, A. (2000) `The scope of perceptual knowledge', *Philosophy* 75: 73-88.

[25] Nanay, B. (2011a) `Do we sense modalities with our sense modalities?', *Ratio* 24 (3): 299-310.

[26] ———. (2011b) `Do we see apples as edible?', *Pacific Philosophical Quarterly* 92 (3): 305-322.

[27] ———. (2012) `Action-oriented perception', *European Journal of Philosophy* 20 (3): 430-446.

[28] O'Callaghan, C. (2011) `Against hearing meanings', *Philosophical Quarterly* 61 (245): 783-807.

[29] Pautz, A. (2009) `What are the contents of experiences?', *Philosophical Quarterly* 59 (236): 483-507.

[30] Price, R. (2009) `Aspect-switching and visual phenomenal character', *Philosophical Quarterly* 59: 508-518.

[31] Prinz, J. (2006) `The Content of Sensation and Perception', In T. Gendler and J. Hawthorne (eds.), *Perceptual experience*, Oxford: Clarendon Press.

[32] Pylyshyn, Z. W. (1999). `Is vision continuous with cognition? The case for cognitive impenetrability of visual perception', *Behavioral and Brain Sciences* 22(3): 341-423.

[33] Robinson, H. (1994) *Perception*. London: Routledge.

[34] Schellekens, E. (2006) `Towards a reasonable objectivism for aesthetic judgements', *British Journal of Aesthetics* 46(2): 163-177.

[35] Sibley, F. (1959) `Aesthetic concepts', *Philosophical Review* 68(4): 421-450.

[36] Siegel, S. (2006) `Which properties are represented in perception?', In T. Gendler and J. Hawthorne (eds.), *Perceptual experience*. Oxford: Clarendon Press.

[37] ———. (2010a) *The Contents of Visual Experience*. New York: Oxford University Press.

[38] ———. (2010b) `The Contents of Perception', in Edward N. Zalta (ed.), *Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Spring. 2013 Edition).

[39] Silins, N. (2013) `The Significance of High-Level Content', *Philosophical Studies* 162 (1): 13-33.

[40] Smith, A. D. (2002) *The Problem of Perception*. Harvard University Press.

[41] Sorensen, R. (2008) *Seeing Dark Things*. Oxford: Oxford University Press.

[42] Travis, C. (2004) `The Silence of the Senses', *Mind* 113 (449): 57-94.

[43] Tye, M. (1995) *Ten Problems of Consciousness*. Cambridge, MA: MIT Press.
[44] 小草 泰 (2009)「知覚の志向説と選言説」,『科学哲学』42 (1): 29-49.
[45] 源河 亨 (2014)「音の不在の知覚」,『科学基礎論研究』41 (2).

著者情報

源河亨（慶應義塾大学大学院文学研究科）